

國學の葉

助教授 黒本 植

載籍の多きことをば、汗牛充棟をぞと稱しけるは、唐人の虚言ありしが、その後、文化の進むに従ひて、著書の夥しくなれる、今は全く實語とぞありになる、そもく、著書には善惡あれば、これを讀むにも、涉獵すべき者あり、熟讀すべき者あり、まづその熟讀すべき者を、その科に従ひて、一二書づゝ撰りて、これを年々歳々、たえず熟讀すべし、さらでは、たとひ万卷の書をよむとも、第一その本領のたゞざる故に、識力も長せず、精神も固らず、文章をかきても、俗陋を免れず、これは、道德文章の上よ、大緊要の事あり、かく定めて、さて後、その他の稗史野乘の雜書を涉獵すべし、雜書なりとて、涉獵せざる時は、その學、偏固に流れぬべし、その學、偏固に流るれば、その人も、頑僻を免れず、昔の人は、よく書を熟讀きたる者なれども、書籍少かりきかば、その弊、たのづから偏固に流れて、その人頑僻なり、今の人は、よくあらゆるの書を涉獵すれども、書籍の多さに従ひて、とかく熟讀する者なければ、その弊、雜駁に流れて、その人浮薄となる、よくくこの區別を先立て、然る後、讀書の功を積まば、始めてその弊をかるべし、これに就きては、その道その學の葉なかるべからず、國學に於ては、村田春海の和學大槩近比の國語讀本前編にこの文を出せり就きて參考すべし、をぞあれど、猶その事いひたらねば、あかぬ心地ぞすべき、その上、近頃初學の人の國學に志ざす、かの書やよけん、この書やあしきなどいひて、屢問するまゝふみ、答せんも、煩しかれば、たのがろつて讀みける者、或は常に机上に備へたける者などをとり出で、その類をわから、著書の名編纂の大凡をぞを、かつくかき付けて、初學の葉とす、さてその見る者に至りては、そのよしあしわからず、それといはんやうもなければ、もらしつ、博學の人にとひて、この外を索あつくるべし、

史學

六國史 百七十卷

書紀三十卷 續紀四十卷

後紀四十卷

欠本
今二十卷寫本

續後紀二十卷

文德實錄十卷

三代實錄五

十卷

書紀を讀むには、書紀シツカイ集解、

河村秀根著

書紀通證

谷川士澗著

續紀を讀むには、續紀考證

村尾元融著

歷朝詔詞解

本居宣長著をもて讀むをくしとす、

類聚國史 欠本 六十餘卷

是は管丞相の編纂にして、類をもて事實を輯められたれば、國史を考ふ

るに便あり、吾が舊金澤藩にて、史局を開き、國學者に其の欠を補はしめられえが、維新の際に及

びしかば、僅に五六卷脱稿して、その事罷にき、

日本紀畧十一卷

醍醐天皇より後一條天皇までを記せり、

扶桑略記十四卷

醍醐天皇より後鳥羽天皇までの事を記せり、

以上、紀略、略記、併せて皆正史とすべし、

古事記三卷

是を詳にせんには、古事記傳

本居宣長著あり、

古語拾遺一卷

齋部廣成の著、是にも注解本、種々あり、言餘抄

龍崎舍著

あまのつきて讀むべし、

本朝神社考六卷

林道春の作にて、國中大小の神社、三千一百三十二座の神社をえるによし、外に

白井宗因の神社啓蒙八卷あり、これもよし、道春の作には、遙にまさるといひ玄人もあり、

前王廟陵記二卷

松下見林の著、これに速水房常の増補したるあり、

以上は皆神書の類にして、史學に參すべき者、

水鏡三卷 中山内府忠親公の作

大鏡八卷 藤原爲業の作

増鏡十卷 一條冬良公の作

以上を三鏡かやみといふ

榮華物語四十一卷

續世繼十卷 榮華物語を世繼と一名いひける故、その後十代ばかりをあら／＼かき記して、續世繼とは、名つけえあり、とぞ、

東鑑五十二卷 この書は、鎌倉將軍六代の間の事を記せり、もと北條家の秘録ありしを、小田原陣の時、黒田孝高よりゆづかひをいれて、和議調ひ、北條氏直の死を赦されしかば、その御禮に、この書と日光一文字の刀と、白貝といふ名譽の法螺貝とを贈りしが、世に出たる始にきて、後その書を長政の時、徳川秀忠公へ献せられき、と黒田家譜に見ゆ、これに、東鑑脱漏一卷あり、

神皇正統記六卷 北畠親房卿の作、是れに、續神皇正統記一卷あり、うへでよむべし、

讀史餘論九卷 新井白石の作、神皇正統記の流を汲みて、書ける者なり、

明德記三卷 明德元年、山名討死の事を記せり、

應永記一卷 一名、大内義弘退治記と號す、

嘉吉記一卷 赤松一家滅亡の事を記せり、

應仁記二卷 應仁の亂後までを記せり、

鎌倉大草子一卷 尊氏末記の遺書にきて、關東大家の舊記あり、どこの序に見ゆ、

室町殿記二十卷 檜村長教の記しゝなり、足利の中比より、義昭將軍までの事を記せりと覺ゆ、余が藏書は、九冊にして、坊間のよりは多し、

以上は大槩雜史にして、正史の後をつゞべき者、

今昔物語六十卷 源隆國の作、中古の風俗を見るによき、

宇治拾遺物語十五卷 是も隆國の作といへど、後人の假托あるべし、されども、其の時代に遠からぬものあり、

古事談六卷

續古事談三卷

古今著聞集二十卷 橘成季の作

以上は、皆近古以上の人情風俗を見るに供すべき者、

善隣國寶記三卷 鳳溪和尚の著、よの書は、外交上往復の書簡を集めたり、

異稱日本傳十五卷 松下見林の著、異邦の書に本邦の事を載せたるを漏さず引きて、その傳聞の誤を正したり、

馭戎慨言四卷 本居宣長の作、往古より豐臣公の比までの外交上の事をあげて、我が邦の人の外を尊みて、内を賤めたることを慷慨してかきし書あり、

以上は、皆支那朝鮮との外交上の事を見るに便あり、

日本遷都考一卷 平本定智の作、往古以來遷都の次第を記せり、

國號考一卷 本居宣長の著、皇國の號に種々ありけるを、諸書に考へて、論述せり、

好古小錄二卷 藤原貞幹の著

好古日錄一卷 同上

日次記事十二卷 黒川道祐の作

集古十種八十卷 この書は、白川少將の編纂せられたる者にて、その書は、谷文晁に命じて寫させられし者といふ、温故の書、これに尙ふるものなし、

以上は、皆考古に有益の書あり、

新撰姓氏錄六卷 萬多親王の御作にて、神武天皇より起りて、弘仁年中に及ぶ、凡千百八十二氏、この氏を、神別、皇別、蕃別と云かてり、神別とは、天神地祇の裔、皇別とは、天皇皇子の派、蕃別とは、漢土三韓歸化人の族なり、

元享釋書三十卷 虎關和尚の著、虎關和尚、三十歳の時、鎌倉の建長寺に往き、元僧の寧一山に會えて、種々物談の時、我か邦の名僧の事を問れて、答辯にしぶかりしるば、いたく耻ちて、それよりこの書を著さんと志ざし、十四五年をへて、成就せりとぞ、教にある話あれば、茲に記しつ、

扶桑禪林僧寶傳十卷 宇治菴藤の僧、高泉和尚の作よて、元享釋書以後の禪僧百十七人の傳なり、日本古今人物志七卷 宇都宮由的の作

以上は、氏族傳記の書あり、我が邦往古の文化には、僧侶の功蹟、尤多ければ、右の傳に就きて、その大体を知りたくべし、

藩翰譜二十冊 新井白石の著

常山紀談十二冊 湯淺元禎の著

武將威狀記十冊 熊澤談菴の著

續武將威狀記十冊 著者の名を忘れたり

以上は、近世の軍記にして、その文章、皆よし、藩翰譜は、殊に絶妙の筆、學ぶべし、

家忠日記 卷數など、皆忘れたり、

寛明日記 是も忘れたり、

以上は、皆徳川時代の日記あり、

(未完)

五日間ノ旅

講師 田中玄黄

千八百九十二年十月十日余が第二ノ故郷ナル北米合衆國みしがん州あなわあ Ann Arbor 市ヲ去ルニ臨ミ友人ハ余ヲ停車場ニ送り手巾ヲ振テ余ガ歸朝ヲ壯ニシ白薔薇ヲ贈テ別ヲ惜ム東西洋ヲ異ニシ黃白人種ヲ異ニスルモ情ハ是レ一ノミ此日午後一時でとろいと Detroit 河畔ニ來レリ此河ハいりゑ湖 Lake Erie ヨリひゆるん湖 Lake Huron ト相通シ北米合衆國ト英領加奈陀ヲ境シ幅大凡一哩ニ近シ河ノ中央ニ軍艦二艘ヲ浮ベ一ハ米國々旗他ハ英國々旗ヲ樹ツルヲ見ル余ヲ乗セタル汽車ハ一艘ノ大ナルモノニ乗込ミタリ艘ハ進行ヲ對岸ニ向ツテ始メタリ余ハ車室ヲ出テ甲板ヲ徘徊セル中某漢ノ余ヲ呼アリ彼レ余ヲ荷物車ニ入ラシム見レバ幾多ノ人々ハ忙ハシゲニ荷物ヲ開キ或ハ閉ツルノ最中ナリ一人ハ余ガ側ニ近寄り

余ハ税關官吏ナリ子ノ荷物ヲ檢査セント余ハ學生ニシテ今ヤ歸朝ノ途ニアリ別ニ檢査スルノ必要ナカラント答ヘシニ彼頭ヲ掉リ